



# 東南アジア

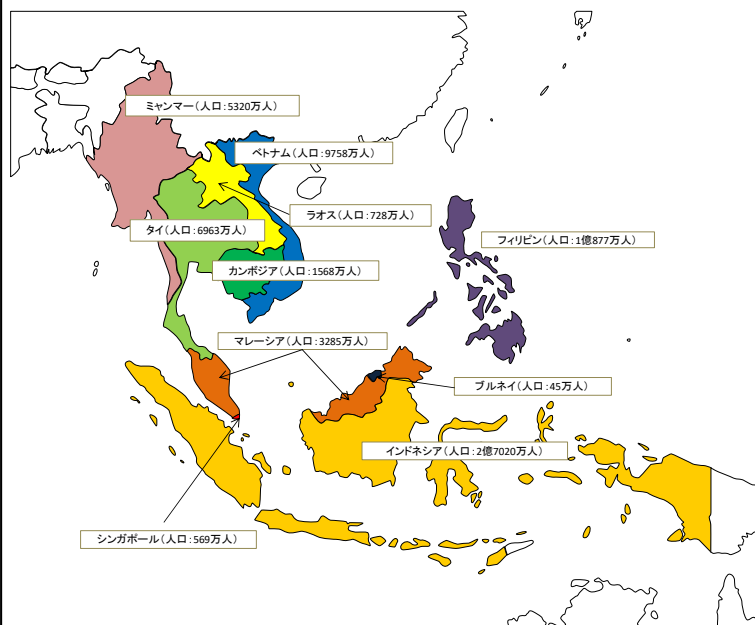
## 1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟10カ国（図1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が極めて低く、経済成長の著しいマレーシア、タイ、フィリピン、インドネシア、ベトナムの5カ国（以下「5カ国」という）は、8～15%（2020年）となっている（表1）。近年、これら5カ国では、その割合は低下していたものの、2020年はベトナムを除き、前年を上回っている。都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、コメなどの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の産出額が増加しないという特徴も有している。上記以外の残り3カ国を見ると、ラオスが18.5%（20年、前年比0.5ポイント増加）、ミャンマーが21.4%（19年、同1.6ポイント低下）、カンボジアが24.2%（20年、同2.1ポイント増加）、

となっている。これらの3カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅れており、相対的に農業の比重が高かった。近年は政情安定化に伴う経済発展により、その割合は低下傾向にあったが、特にミャンマーでは政情不安が再燃し、GDP成長率は大きくマイナスに振れており、見通しが困難となっている。また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により経済活動が低迷し、海外渡航が制限されたため、観光業の盛んな国や地域での経済に対する影響は大きかった。

国別の特徴として、マレーシアは、油ヤシ、天然ゴムなど永年性作物の栽培が盛んな一方、フィリピンは、トウモロコシ、コメなどの穀物が中心となっている。畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、国ごとに畜種の重要度が異なるため、品目ごとの生産量には大きな差がある。

図1 ASEAN加盟国



資料：国際通貨基金（IMF）「World Economic Outlook Database」  
注：数値は2020年。

表1 GDPに占める農業の割合

国	(単位：%)		
	2019年	20年	差
シンガポール	0.0	0.0	0.0
ブルネイ	1.0	1.2	0.2
マレーシア	7.3	8.3	1.0
タイ	8.1	8.7	0.6
フィリピン	8.8	10.2	1.4
インドネシア	13.3	14.2	0.9
ベトナム	15.5	14.9	▲ 0.6
ラオス	18.0	18.5	0.5
ミャンマー(注)	23.0	21.4	▲ 1.6
カンボジア	22.1	24.2	2.1

資料：アジア開発銀行  
注：ミャンマーは2018年および2019年の数値。

ASEAN各国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、いずれも主食となる米が多くなっている。また、主要な畜産物は豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理由

から豚肉を消費しないイスラム教徒が多いインドネシアやマレーシアなどでは鶏肉が多く、宗教上の制約が比較的少ないベトナムやフィリピンでは豚肉が多い(表2、3)。

表2 ASEANの主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

		(単位:千トン)						
国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2016	2,740	65	48	195	1,676	821	45
	17	2,571	73	46	218	1,598	845	45
	18	2,639	69	47	224	1,588	805	46
	19	2,353	60	44	223	1,589	654	48
	20	2,322	68	43	221	1,532	807	51
タイ	2016	31,857	4,390	174	913	1,629	690	1,200
	17	32,899	4,821	168	910	1,661	695	1,200
	18	32,348	5,069	161	898	1,700	710	1,200
	19	28,618	4,535	163	895	1,740	703	1,200
	20	30,231	4,806	132	894	1,782	713	1,200
フィリピン	2016	17,627	7,219	275	1,763	1,243	462	20
	17	19,276	7,915	239	1,677	1,287	492	20
	18	19,066	7,772	203	1,624	1,414	534	15
	19	18,815	7,979	201	1,608	1,484	583	15
	20	19,295	8,119	175	1,500	1,394	606	17
インドネシア	2016	54,031	23,578	550	340	2,301	1,486	1,418
	17	55,252	28,924	516	317	3,176	4,633	1,448
	18	59,201	30,254	523	216	3,838	4,688	1,476
	19	54,604	22,586	530	236	3,929	4,753	1,473
	20	54,649	22,500	541	241	3,708	5,044	1,485
ベトナム	2016	43,112	5,244	395	3,665	741	472	823
	17	42,764	5,110	410	3,733	786	310	909
	18	44,046	4,874	427	3,816	840	349	964
	19	43,495	4,732	450	3,329	990	410	1,013
	20	42,759	4,560	470	3,550	1,146	474	1,076
ラオス	2016	4,149	1,552	53	83	27	16	7
	17	4,040	1,193	54	87	28	15	7
	18	3,585	982	55	86	30	16	7
	19	3,535	794	57	93	33	17	7
	20	3,687	1,150	59	98	36	17	7
ミャンマー	2016	25,673	1,831	449	874	1,521	542	2,415
	17	26,546	1,909	448	907	1,581	555	2,417
	18	27,574	1,984	455	1,184	1,524	576	2,420
	19	26,270	1,986	490	1,093	1,458	580	2,529
	20	25,100	2,041	490	1,127	1,500	570	2,466
カンボジア	2016	9,952	663	64	111	17	19	24
	17	10,518	750	63	102	17	20	24
	18	10,892	1,232	62	93	18	19	24
	19	10,886	895	62	93	18	19	24
	20	10,960	950	61	93	17	19	24

資料：国際連合食糧農業機関（FAO）「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵および鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

注2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

注3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

注4：黄色部は各品目における2020年の最大生産量の国を示す。

表3 5カ国の畜産物の1人当たりの年間消費量

		(単位:kg/人/年)				
国	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳	
インドネシア	3	1	13	19	5	
マレーシア	8	7	53	21	8	
フィリピン	5	21	22	6	5	
タイ	3	21	17	12	20	
ベトナム	7	43	17	7	12	

資料：生産量は各国統計、人口は国際通貨基金、それ以外はFAO「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を含む。

注2：消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注3：マレーシアの生産量は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

注4：黄色部は各品目における2020年の1人当たりの年間消費量が最大の国を示す。

## 2 東南アジア諸国の畜産の動向

### (1) 酪農・乳業

ASEAN諸国では、高温・多湿な気候条件が乳用牛の飼養にあまり適しておらず、良質な飼料の自給も困難なことから、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではなく、牛乳・乳製品は、伝統的に一般的な食材とはいええない。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入りの加糖れん乳が中心であった。しかし、近年はコールドチェーンの発達や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱な酪農生産基盤から牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、2億7000万人の人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアでは、乳製品需要の伸びが期待されている。

一方で、ASEAN各国では、公的な統計に反映される生乳生産量が少ないことから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

#### ① 生乳生産動向

2020年の乳用牛飼養頭数および生乳生産量を見ると、乳製品需要の高まりを背景にいずれも増加傾向にある(図2、表4)。

5カ国の状況を見ると、インドネシアの乳用牛飼養頭数は56万8000頭(前年比0.5%増)、生乳生産量は94万6910トン(同0.3%増)となった。同国では、乳用牛の大部分はジャワ島のジャカルタなどの大消費地に近い冷涼な気候の山岳地域で飼養されているが、乳用牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めている。近年は、熱帯に属するインドネシアでも、厳しい環境下に対応する高品質かつ生乳生産量が多い乳用牛の育種に取り組んでいる。同国政府は牛肉の国内自給率を90%にするという目標を掲げ、12年から生体牛および牛肉の輸入規制などを行った。しかし、結果として国内の牛肉需給のひっ迫から乳用牛のと畜頭数が増加し、乳用牛飼養頭数は大幅に減少した。13年下期から、国内牛肉価格を基準に輸入の可否を判断する基準価

格方式の導入などにより、輸入規制が緩和されたことで、14年以降は、乳用牛飼養頭数、生乳生産量ともにおおむね増加傾向にある。なお、22年に発生した口蹄疫により乳用牛は大きな被害を受けており、飼養頭数および生乳生産量の減少が懸念されている。

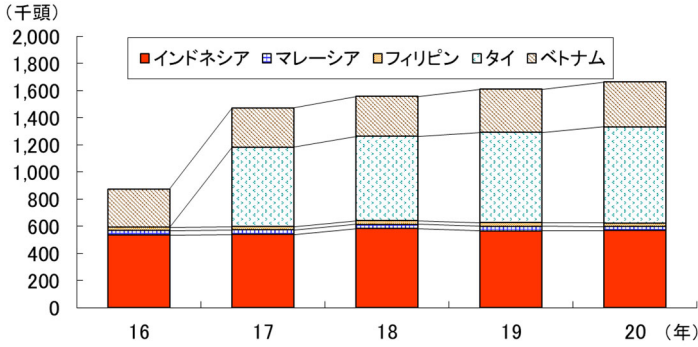
マレーシアの乳用牛飼養頭数は3万581頭(同12.3%減)、生乳生産量は4万1800トン(同3.0%増)となった。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラ州などである。歴史的に油ヤシや天然ゴムのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料生産基盤は限定的とされるが、近年、自給率を高めるために国内の生乳生産基盤の強化が行われている。

フィリピンの乳用牛飼養頭数は2万6000頭(前年並み)、生乳生産量は2万6700トン(同9.4%増)となった。同国では水牛が乳用として飼養されており、生乳生産量の約6割が牛由来、残りの4割は水牛由来とヤギ由来とみられている。酪農環境の厳しさから国内生産に対する民間の資本投資があまり盛んに行われず、飼養頭数は伸び悩んでいる。

タイの乳用牛飼養頭数は70万7236頭(同6.1%増)、生乳生産量は134万2181トン(同1.8%増)となった。乳用牛飼養頭数は、経済発展による食の多様化や学校給食用など飲用乳需要の増加を反映し、09年以降、増加傾向で推移している。

ベトナムの乳用牛飼養頭数は33万1368頭(同4.3%増)で、生乳生産量は104万9260トン(同6.4%増)となった。乳用牛の約5割は、主要消費地となるホーチミン市近郊で飼養されている。01年に政府が酪農振興計画を打ち出して以来、ビナミルク、THミルクなど大手乳業による大規模酪農場の開設が続いたことなどから、飼養頭数、生乳生産量ともに増加している。

図2 乳用牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

注：2016年のタイの数値は未公表。

表4 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向（2020年）

(単位：千頭、千トン)

国名	飼養頭数	前年比 (増減率)	生乳生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	568.0	0.5%	947	0.3%
マレーシア	30.6	▲12.3%	42	3.0%
フィリピン	26.0	0.0%	27	9.4%
タイ	707.2	6.1%	1,342	1.8%
ベトナム	331.4	4.3%	1,049	6.4%

資料：各国政府統計

注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。  
注2：フィリピンの生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

## ② 牛乳・乳製品の需給動向

ASEAN諸国では、牛乳・乳製品の生産量に対し、輸入量も消費量も多い状況にある（表5）。多くの国で需要が伸びており、自給率向上のため、生産拡大に取り組んでいる。

2020年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量を5カ国別に見ると、インドネシアは5.1キログラムとなった。ただし、調製粉乳と加糖れん乳の消費が多く、飲用乳の消費は大都市圏に限られ、絶対量は少ない。

マレーシアは7.6キログラムとなった。2020年はCOVID-19の影響による移動制限や祭りの取り止めなどにより生乳需要が低下したとされる。一般的には甘味嗜好を背景に、加糖れん乳が多く消費されており、牛乳はフレーバー付きの需要が高い。輸出量は5カ国の中で2番目に多いが、これはニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料に国内で調製品に加工し、再輸出しているためである。

フィリピンは4.6キログラムとなった。国内で流通する牛乳・乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入乳製品および輸入品を原料とした加工品となっている。

タイは19.7キログラムとなった。デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構などの酪農業協同組合や外資系企業による牛乳・乳製品の生産拡大および学校給食用の需要などにより、消費量は増加傾向で推移している。なお、同年の牛乳・乳製品の輸出量は19万8000トンとなっている。これは、豪州、ニュージーランドから輸入した脱脂粉乳などを原料として、還元乳、はっ酵乳などに加工し、周辺国などを中心に輸出しているためである。

ベトナムは12.5キログラムとなった。従来、同国では牛乳や乳製品の消費量は少なかったが、経済成長と政府の酪農振興策を背景に、近年、徐々に受け入れられ、市場は拡大傾向にある。

表5 牛乳・乳製品の需給動向（2020年）

(単位：千トン、kg/人/年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	947	435	1,354	28	5.0
マレーシア	42	374	250	167	7.7
フィリピン	27	485	496	16	4.6
タイ	1,342	252	1,397	198	20.0
ベトナム	1,049	246	1,268	27	13.0

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

## (2) 肉牛・牛肉産業

ASEAN諸国では、食習慣や経済発展の差が大きいことを背景に、牛肉の1人当たり年間消費量は、国ごとに開きがあるが、近年の消費量はおおむね横ばいで推移している。

牛肉消費が伸びない要因の一つに、一部の品種において、繁殖牛のと畜が制限され、老齢牛中心にと畜が行われていたことから、牛肉が硬い肉というイメージが定着していたことなどが挙げられる。

### ① 牛の生産動向

2020年の肉用牛などの飼養頭数を5カ国別に見ると、インドネシアは1744万頭（前年比3.0%増）となった（図3、表6）。同国政府は国産牛肉の需要に対応するため、肉用牛および水牛の増産を奨励しており、人工授精技術の普及などにより増頭傾向にある。地域別



では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して短期間肥育するフィードロット産業もあるが、経営体数は少ない。なお、乳用牛と同様に口蹄疫の影響が懸念されている。

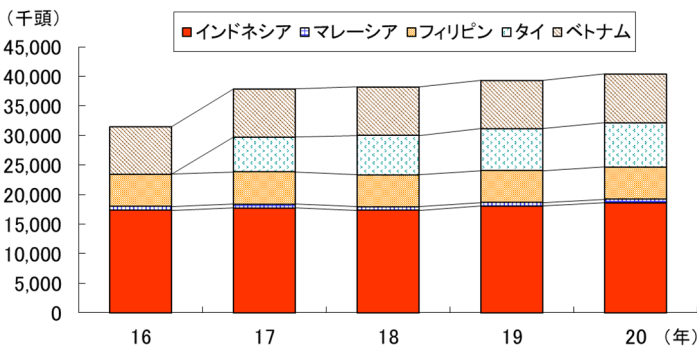
マレーシアは60万1688頭(前年比10.1%増)となった。プランテーションで放牧し、下草を食べさせるなど粗放的な一貫経営が多く見られるほか、フィードロットなどの集約的な経営を行っているところもある。

フィリピンは254万2000頭(同0.3%増)となった。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、飼養頭数20頭未満の小規模経営が大半を占めている。飼養頭数の多い水牛は、農作業の耕作や物資の移送のために役用として飼養されている。

タイは623万140頭(同6.1%増)となった。政府の肉牛振興政策などにより01年以降、微増傾向で推移している。

ベトナムは591万3295頭(同3.0%増)となった。ハノイ人民評議会の計画では、養豚や養鶏業に比べて肉用牛および乳用牛の生産拡大に注力しているとみられている。また、同国の家畜開発戦略では、21~30年の牛肉生産量の年間平均成長率を1%以上とすることを目標としている。なお、生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入し、肥育を行う経営が一般的である。

図3 肉用牛・水牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

注：2016年のタイの数値は未公表。

表6 肉用牛・水牛飼養頭数と牛肉生産量(2020年)

(単位：千頭、千トン)

	飼養頭数				牛肉生産量 (水牛を含む)	前年比 (増減率)
	肉用牛	前年比 (増減率)	水牛	前年比 (増減率)		
インドネシア	17,440	3.0%	1,154	1.8%	472	▲10.9%
マレーシア	602	10.1%	45	▲5.2%	48	▲6.7%
フィリピン	2,542	0.3%	2,866	▲0.3%	350	▲12.9%
タイ	6,230	6.1%	1,256	2.4%	208	3.6%
ベトナム	5,913	3.0%	2,333	▲2.3%	562	1.0%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州を含まず)。

## ② 牛肉の需給動向

2020年の牛肉生産量(水牛肉を含む)を5カ国別に見ると、インドネシアは47万1950トン(前年比10.9%減)、マレーシアでは4万7930トン(同6.7%減)、フィリピンは34万9500トン(同12.9%減)、タイは20万7650トン(同3.6%増)、ベトナムは56万1763トン(同1.0%増)となった(図4、表7)。

20年の牛肉(水牛肉を含む)の1人当たり年間消費量を5カ国別に見ると、インドネシアは2.7キログラムとなった。20年は飼料価格高騰や労働者の衛生管理コスト増により生産性が大きく悪化し、食肉卸売業者の間でストライキが実施されるまでの事態となったことが、生産量が減少した一因と推測される。また、COVID-19により輸入環境が厳しい中で、以前から国内生産の拡大に取り組んでいるが、人口増加による需要増に追い付いていない状況となっている。なお、同国では、牛肉の消費習慣は民族・宗教によって異なっており、消費地域は人口の6割が居住し、所得水準が比較的高い首都ジャカルタがあるジャワ島に集中している。

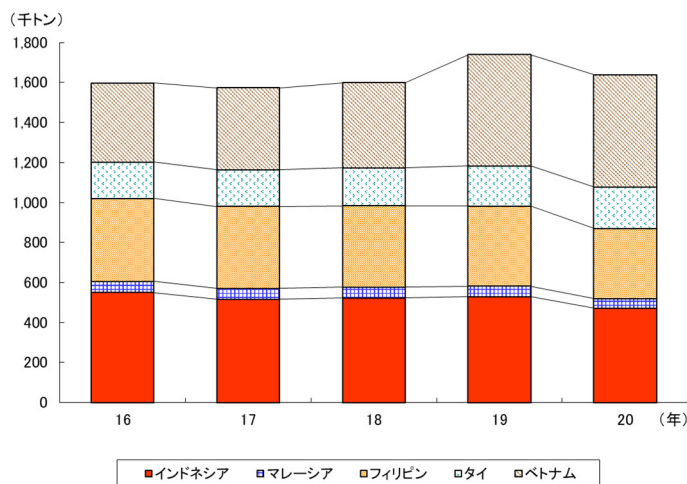
マレーシアは7.6キログラムとなった。牛肉自給率は2割程度で、輸入牛肉の割合が大きくなっており、主な輸入先はインド、豪州である。COVID-19による移動制限により、食肉需要が低下したとされる。

フィリピンは4.6キログラムとなった。牛肉自給率は7割程度であり、主な輸入先はブラジル、インド、豪州である。このうち、インドから輸入される安価な水牛肉は、国内法の規制によりコンビーフなどの加工用に限定されている。同国も同様にCOVID-19の影響により外食産業を中心に需要が低下し、生産量が低下したとされる。

タイは3.4キログラムとなった。消費量に対して一定の牛肉生産量があることで、輸入量は4万9000トンと5カ国中で最も少ない。

ベトナムは7.1キログラムとなった。牛肉自給率は4割弱であり、主な輸入先はインド、豪州、米国である。経済発展が著しく、アフリカ豚熱の流行もあった中で牛肉需要は増加しているとみられている。

図4 牛肉・水牛肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表7 牛肉の需給動向（2020年）

(単位：千トン、kg/人/年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	472	269	741	0	2.7
マレーシア	48	205	248	5	7.6
フィリピン	350	153	501	1	4.6
タイ	208	49	238	19	3.4
ベトナム	562	134	695	1	7.1

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：水牛肉を含む。

注2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

注3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

### (3) 養豚・豚肉産業

ASEAN諸国は、インドネシア、マレーシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口も多く、国によって豚肉の消費量には大きな差があり、豚肉の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国であっても、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域など限定的ではあるものの、養豚業は存在している。

### ① 豚の生産動向

ASEAN諸国では、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの疾病に加え、アフリカ豚熱が発生しているため、衛生対策が課題である。

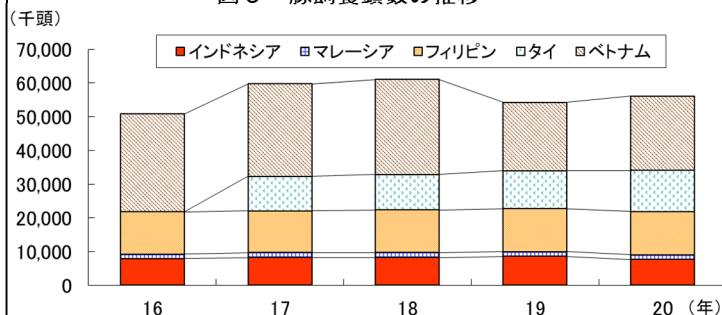
2020年の豚飼養頭数を5カ国別に見ると、イスラム教徒が比較的多く、1人当たりの年間消費量が少ないインドネシアおよびマレーシアでは、それぞれ762万3000頭（前年比10.8%減）、145万272頭（同1.3%減）となった（図5、表8）。両国の飼養頭数の差は、非イスラム教徒がインドネシアでは約3600万人（人口2億6691万人）であるのに対し、マレーシアでは約1300万人（人口3252万人）と、非イスラム人口の差によるものである。

フィリピンは、宗教的な制約が比較的小さいことから5カ国の中でベトナムに次いで飼養頭数が多い。20年は1279万6000頭（同0.7%増）となった。

タイは、近年、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返しているが、20年は1222万8255頭（同8.3%増）となった。

ベトナムは、国内の豚肉需要の拡大を受けて2000～05年にかけて飼養頭数は増加し、その後は、疾病の発生や飼料価格の高騰、出荷価格の低迷などから、おおむね横ばいで推移した。直近では、アフリカ豚熱の流行により同国の養豚業は大きな影響を受け、19年の飼養頭数は大きく落ち込んだが、伝染病対策に取り組み、20年には2202万8091頭（同9.0%増）と回復している。

図5 豚飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

注：2016年のタイの数値は未公表。

表8 豚飼養頭数と豚肉生産量（2020年）  
（単位：千頭、千トン）

国名	飼養頭数		生産量	
	飼養頭数	前年比 (増減率)	生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	7,623	▲ 10.8%	281	▲ 18.9%
マレーシア	1,450	▲ 1.3%	221	▲ 1.0%
フィリピン	12,796	0.7%	2,143	▲ 6.7%
タイ	12,228	8.3%	1,490	▲ 3.2%
ベトナム	22,028	9.0%	4,020	▲ 1.6%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

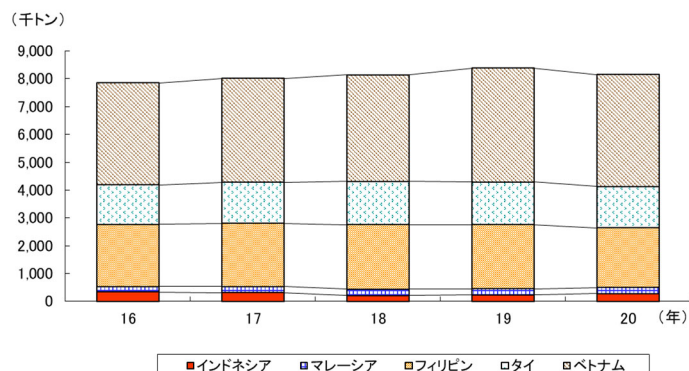
## ② 豚肉の需給動向

2020年の5カ国の豚肉生産量を見ると、インドネシアは28万940トン（前年比18.9%増）、マレーシアは22万586トン（同1.0%減）、フィリピンは214万2600トン（同6.7%減）、タイは149万トン（同3.2%減）、ベトナムは402万105トン（同1.6%減）となった（図6、表9）。19年以降、アフリカ豚熱の影響を受けているフィリピンが大きく生産量を落としている。同国では21年に関税の引き下げおよび小売価格の上限を設定するなど、需給安定のための対策を講じている。

ASEAN諸国の豚肉消費は、宗教の影響を強く受けている。20年の豚肉の1人当たり年間消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで1.0キログラムであったのに対し、食肉に関する宗教的制約の少ないベトナムでは43.4キログラム（参考：中国29.4キログラム：20年）、フィリピンでは21.4キログラム、タイでは21.1キログラムとなっており、国による差が大きい。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民（非イスラム教徒）などが人口の4割程度を占めていることから、国全体では7.2キログラムとなっている（なお上述の非イスラム人口で除した1人当たり年間消費量を見ると、インドネシアは7.86キログラム、マレーシアは18.15キログラムである）。

図6 豚肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表9 豚肉の需給動向（2020年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量	
					(千トン)	(kg/人/年)
インドネシア	281	3	283	0	1.0	1.0
マレーシア	221	19	236	4	7.2	7.2
フィリピン	2,143	187	2,327	2	21.4	21.4
タイ	1,490	27	1,474	44	21.1	21.1
ベトナム	4,020	225	4,238	7	43.4	43.4

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを参照。

注2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

## （4）養鶏・鶏肉・鶏卵産業

### ① 鶏の生産動向

ASEAN諸国では、肉用鶏や採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏やブロイラーのほか、アヒルなどの家きんも飼養されている。

2020年の状況を5カ国別に見ると、インドネシアの肉用鶏出荷羽数は32億2496万羽（前年比7.1%減）であり、このうち約9割がブロイラーとなる。ブロイラーの生産は、主に西ジャワ州、東ジャワ州、中部ジャワ州で行われ、当該3州で全国の生産羽数の半数以上を占めている。ブロイラーの出荷羽数が減少している一方で地鶏の出荷羽数は増加している。同年の鶏肉生産量は348万9330トン（同7.9%減）となった（図7、表10）。また、採卵鶏および地鶏生産は、ブロイラーと同様、上記3州が中心となっており、採卵鶏飼養羽数は3億4518万羽（同2.6%増）、鶏卵生産量は514万1570トン（同8.2%増）となった。

マレーシアの肉用鶏飼養羽数は1億5189万羽（同4.7%増）、鶏肉生産量は170万2800トン（同2.9%



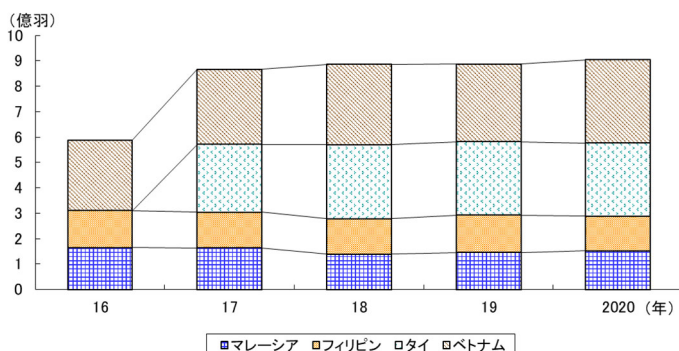
増)となった。また、採卵鶏飼養羽数は6139万羽(同16.9%減)、鶏卵生産量は79万5500トン(同17.5%増)となった。

フィリピンの肉用鶏飼養羽数は1億3706万羽(同7.1%減)、鶏肉生産量は180万9900トン(同6.1%減)となった。COVID-19の影響により生産量は前年を下回った。また、採卵鶏飼養羽数は4120万2000羽(同6.2%増)、鶏卵生産量は60万5800トン(同3.9%増)となった。アフリカ豚熱により、養豚業から採卵鶏業にシフトする生産者もいたとされる。

タイでは、04年の鳥インフルエンザの発生以降、日本やEU向けなどの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは12年7月、日本向けは13年12月、韓国向けは16年11月に解禁された。肉用鶏飼養羽数は2億8721万羽(同0.6%減)、鶏肉生産量は232万6433トン(同2.3%増)となった。また、採卵鶏飼養羽数は5737万1645羽(同0.9%減)、鶏卵生産量は87万4637トン(同0.4%増)となった。

ベトナムの肉用鶏飼養羽数は3億2781万羽(同7.3%増)、鶏肉生産量はアフリカ豚熱の影響から豚肉生産量が回復しきれていないため、引き続き手ごろな価格帯の鶏肉需要が伸びたことで、146万4918トン(同11.8%増)となった。また、鶏卵生産量は64万2072トン(同9.4%増)となった。

図7 肉用鶏飼養羽数の推移



資料：各国政府統計

注1：2015年のマレーシアおよび2016年のタイの数値は未公表。

注2：インドネシアの肉用鶏は、生産羽数のため割愛。

表10 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量(2020年)

国名	飼養羽数				生産量			
	肉用鶏	前年比(増減率)	採卵鶏	前年比(増減率)	鶏肉	前年比(増減率)	鶏卵	前年比(増減率)
インドネシア	3,224,961	▲7.1%	345,181	2.6%	3,489	▲7.9%	5,142	8.2%
マレーシア	151,891	▲4.7%	61,390	▲16.9%	1,703	2.9%	796	17.5%
フィリピン	137,063	▲7.1%	41,202	6.2%	1,810	▲6.1%	606	3.9%
タイ	287,210	▲0.6%	57,372	▲0.9%	2,326	2.3%	875	0.4%
ベトナム	327,812	7.3%	81,688	6.0%	1,465	11.8%	642	9.4%

資料：各国政府統計

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

注2：インドネシアの肉用鶏は生産羽数の数値。

注3：マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

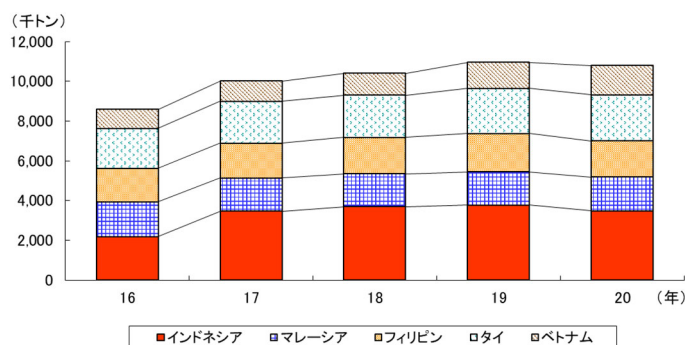
## ② 鶏肉の需給動向

鶏肉は宗教上の制約が少ないことから、ASEAN諸国では身近で重要な動物性たんぱく質となっており、経済成長に伴う消費の伸びを受け、生産量は増加傾向で推移しているものの、COVID-19の影響により停滞している(図8、表11)。

2020年の鶏肉の1人当たりの年間消費量を見ると、マレーシアは52.9キログラムとなった。同国は、イスラム教を信仰するマレー系などが人口の過半を占めていることから、宗教的な制約が少ない鶏肉が多く消費されている。

タイは16.5キログラムとなった。同国は鶏肉の輸出に注力しており、コロナ禍にもかかわらず、輸出の伸びを背景に鶏肉生産量も増加傾向にある。

図8 鶏肉生産量の推移



資料：各国政府統計



表 1 1 鶏肉の需給動向（2020年）

（単位：千トン、kg/人/年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	3,489	0	3,489	0	12.9
マレーシア	1,703	71	1,723	52	52.9
フィリピン	1,810	533	2,342	1	21.5
タイ	2,326	2	1,155	1,174	16.5
ベトナム	1,465	238	1,683	19	17.2

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

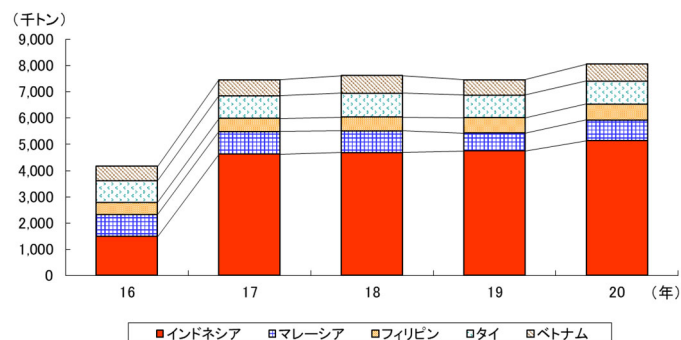
注2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。鶏卵の需給動向。

### ③ 鶏卵の需給動向

東南アジア諸国では、鶏卵価格の変動に伴い生産調整を行うなどの需給安定機能が十分に働かないことから、供給過剰とひっ迫を繰り返すという問題を抱えている。

鶏卵の1人当たり年間消費量は、マレーシア、インドネシアの順に多く、2020年はそれぞれ20.9キログラム、19.0キログラムとなった。一方で、最も消費量の少ないフィリピンでは同5.6キログラムと、国によって大きな開きがある（図9、表12）。

図9 鶏卵生産量の推移



資料：各国政府統計

表 1 2 鶏卵の需給動向（2020年）

（千トン、kg/人/年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	5,142	0	5,141	0	19.0
マレーシア	796	0	682	114	20.9
フィリピン	606	0	606	0	5.6
タイ	875	0	861	14	12.3
ベトナム	642	0	642	0	6.6

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

注2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

注3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。